

この町の復興の源

気仙沼市立唐桑中学校 2年 吉田 美咲

澄んだ海に白く映える橋。空と海に吸い込まれていく感覚は、まるでアトラクションの様だ。「かなえおおはし」と呼ばれる気仙沼湾横断橋を初めて渡った時、私は、「この町は、復興してきたのだ」と感じた。

今年の三月、気仙沼の町は、大きく前進した。復興道路として、三陸沿岸道路「気仙沼湾横断橋」の開通によって、宮城県内総延長百二十六キロメートルにおよぶ復興道路が完成した。仙台市と岩手県宮古市が高速道路で繋がり、そして、まもなく福島から青森まで命の道として全ての道が繋がるのだ。これにより、水産物の輸送時間の短縮や、水産加工品の振興、観光地へのアクセス向上で、町はだんだん動き出してきた。震災前いいえ震災前以上に活気付く未来が見えてきている。

では、この復興の為に使われたお金は、いったいどこから来ているのだろうか。国は、震災後すぐ復興予算を考え出した。震災の発生から十年間に投入された国の復興予算は、およそ三十二兆円にのぼる。その中の四割を占めるのは、「復興増税」になっている。復興増税の中に「復興特別所得税」が新しく創設された。復興特別所得税とは、震災からの復興に必要な財源を確保するために創設された新しい税金である。これらは、復旧・復興事業の財源に充てられることが規定されていて、被災者支援、住宅再建・復興まちづくり産業・なりわいの再生、原子力災害からの復興・再生。まさに、この十年、私がこの町で身近に感じてきた復興に使われてきた税金だった。そして復興特別所得税は、この町だけではなく、日本中の、頑張っている皆さんが納税してくれたお金だと考えると、とてもありがたく、感謝の気持ちでいっぱいになった。

小学生だった私は、三陸沿岸道路工事の現場所長さんたちと、子ども一〇番の防犯活動をしたり、閉校した小学校から繫いだひまわりを一緒に育てたり、工事現場の皆さんがいつも地域の中において、道路が出来ていく様子を間近で見してきた。

「この道路は、所長さんたちが必ずつなぐからね。つないだ後は、十年後、二十年後も、ここにいる美咲ちゃんたちが、この景色を守っていくんだよ。」

所長さんと約束したことの意味を考えたとき、この町の景色を守るためには、今日まで大切に積み重ねられてきた財源をこれから先も納税で支えていかなければならないのだと強く思った。

復興特別所得税の実施期間は、あと十六年。そのころ私は三十歳。この町の景色はさらに色付きを増していることだろう。いつか、私も大人になったとき、復興と税金に感謝の思いを込めて、納税したい。私の納税が未来のまちづくりに繋がるのだから。